

---

# ラーメン/stay night

ジョージ・ワシントン三世

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ラーメン/stay night

### 【Nコード】

N7770M

### 【作者名】

ジョージ・ワシントン三世

### 【あらすじ】

士郎に憑依した男が目指したのは、誰もが幸せになるハッピーエンド！神様から貰った力を使って、新たな物語を紡ぐ……………。ことはなく、シローに憑依した男は、ラーメン屋の店主となり適当な人生を生きていく。これはシローとラーメンとポカリとセイバーの愛？の物語。

## STAGE 1

「子供の頃、僕は正義の味方に憧れてた」

「へえ」

「……………リアクションそれだけかい？」

「いやだつて普通じゃない？」

俺も子供の頃はウルトラマンに憧れてたよ」

「ま…まあそうだね…」

「そうだよ」

「ところで士郎は今でも『正義の味方』に憧れてるかい？」

「いや全然。俺の将来の夢はラーメン屋だよ」

「ラーメン屋か……………いい夢だね」

「ああ、もし俺がラーメン屋を開いたら爺さんも食べに来てくれよ。  
半額にしとくぜ」

「え？、無料<sup>タダ</sup>じゃないのかい？」

「H A H A H A H A H A、何を言っているのだから…  
無料<sup>タダ</sup>より高い物はないのですよ、切嗣さん」

「そう……だね」

「星が綺麗だな」

「ああ、とても……綺麗だ……」

衛宮切嗣の生の声を聞いたのは、それが最後だった。

お約束通りトラックに轢かれた後に待っていたのは、憑依というタモリさんが出てきそうな展開。

まさか自分が世にも奇妙な物語の主人公になるとは思わなかった。

気付くと白い天井、そして背の縮んだ俺と、他にも包帯を巻かれた少年少女たち。

やって来たのは衛宮切嗣と名乗る男！

その時だよ！頭に高圧電流が走ったような衝撃を受けたのはッ！

『衛宮切嗣』という名前に、聞き覚えがあった。

友人の持っていたPSPのソフト。

『タイガーころしあむ』というゲームに登場したキャラの筈だ。

確か魔法少女やら猫耳怪物やらが、全美少女の猫耳化を廻って争う、ドタバタ劇の筈だ。

いやゝ良かった。良かった。

これがデンジャラスで命の危険がある世界なら兎も角、こんなほのぼのとした世界で殺し沙汰が起きるわけがなゝい。……それに高校生ぐらいになれば爺さんも復活するみたいだし、安心してラーメン屋を開ける！……

「おい、店主」

醤油ラーメンはまだか。  
我はお腹が減ったぞ〜」

「ういーーーーー。醤油ラーメンおまち！」

「おお！できたかッ！」

常連の金髪赤目の外国人が、醤油ラーメンを食べる。

ちなみに彼には弟？がいて二人とも常連だ。

だが二人一緒に来ないというのは、もしかしたら兄弟仲が悪いのかもしれない。

「ええい！聞いているのか！店主！」

「はいはい、聞いてますよ」

「全く言峰ときたら、毎回毎回、マール以外の料理は出せんのかッ！」

「あゝ、坂の上の教会の神父さんですか。

あの人、激辛料理が好きですからね〜。家の店にもよく激辛担担麵を食べに来るんですね。

家としちゃ、来る度に御代わりをしてくれるんで嬉しいんですけどね〜」

「なに！ぬうう！言峰の奴、この店にまで魔の手を伸ばしていたのかッ！」

「いえいえ魔の手というより神の手じゃないですか？

神父さんなわけですし……」

「フン！神の手だと？」

言峰如きは孫の手でも使っているというのだ！」

「孫の手なら有りますよ」

「有るのか、孫の手ッ！」

「ついでにポカリもあります」

「知らんッ！」

「ポカリは美味しいですよ」

「だから何故ラーメンの屋台にポカリがあるッ！」

「新メニュー、ポカリラーメン……いけるかもしれません……」

「そんなチンチクリンなラーメンがイケてたまるかッ！」

「藤ねえは美味しいって言ってましたけど……」

「あの人外魔境と一緒にするなッ！」

「でも俺の作った衛宮汁を飲んだら倒れましたよ」

「なんだ衛宮汁って……」

「ほらテニプリに乾汁ってあったでしょう？」

面白がって作ってみたんですよ……。

でも何分、レシピが分からなかったので……」

「分からなかったの？」

「ドリアンとピーマンとポカリを混ぜたんですよ」

「死ぬわ！……そしてそこでもポカリに拘るのか！」

「家の看板メニューですから、ポカリ」

「ラーメン屋なのだからラーメンを看板メニューにしろッ！」

「それには複雑な事情があるんです……」

私がまだガンダムファイターとして未熟な時、東方から現れた腐敗した人がですね……」

「バレバレの嘘をつくな！」

「な、何故分かったのですか！

この完璧なるトリックがッ！」

「何所をどう考えればそれがトリックになる！

……まあいい。そろそろ我は行くぞ」

「お会計ですか？」

「そうだ」

「合計で百七十万円です」

「ほう、安いな」

ギャグの通じない反応にガクツとくる士郎。

「いやそれ冗談ですから。」

真面目に受け止められても……」

「そうか、我も安すぎると思っていたのだ。  
そうだな、七百万が相場か……」

「いや全然相場じゃないですから」

「戯け！物の価値とは王が定め王が決めるもの！  
民衆は黙って王の決定に従うが良い！」

「はあゝ。まあお金は幾らあっても困るものじゃないですしね。  
ありがたく頂いておきます」

「最初から素直にそうしておけ……  
そうだ店主。夜は余り出歩くなよ」

「は？屋台なのに夜歩かなくていつ商売するんですか？」

「細かい事は気にするな。」

最近は何事であろう。人目の無い場所は歩くなと言ったことだ」

「そうですか。お気遣いありがとうございます。  
じゃ、毎度あり〜」

金髪さんは、最後に高笑いすると帰っていった。



「ふう。今日も終わったか」

漸く最後の客が帰って一息つく。

「イタッ……なにこの模様……」

気付いたら変な模様が手に浮かんでいた。  
それを見た土郎は……

「ま、いつか……」

そのまま片付けを続けたとき！

## STAGE 2

その日の夜、士郎は家にある土蔵で、包丁を研いでいた。別に包丁ぐらい台所でも研げるが、気分の問題だ。

「いてッ！…………いけね切っちゃったよ…」

シローは今日の朝、虎が突貫してきた影響で寝る時間がなかった。お陰で寝不足のまま包丁を研いでいたのだが、そのせいで初歩的なミスを犯してしまった。

包帯を探していると目にゴミが入ったようで、目を瞑る。

同時に、シローの血が落ちた事で起動する魔方陣。

やがて魔方陣から溢れていた光が止むと、そこには一人の少女。大体シローと同じ年頃に見える、金髪で緑色の目をした少女。

時代錯誤的な甲冑を着込んでいるが、それがどうにも似合っている。彼女はやがて目を開き言った。

「問おう、貴方が私のマスターか」

「おお！バイト希望者だ！」

それは彼女にとって予想外の返答だった。

「……………はい？」

少女は思考停止に陥った。

前のマスターの時は、召喚早々に無視されるという散々な状況だった。

だが、今回の召喚は前にもまして意味不明だ。

「いやゝ。冗談半分にHPでバイトを募集したんだけど、まさか本当に来る人が居たなんて！

これも日頃の行いがいいからだな！」

「はあゝ」

混乱している所にマスター（仮）のマシガントークにより、完全に会話の主導権を奪われる。

「それじゃ！早速だけど仕事に行こう！」

「りょ…了解です、マスター」

と言う前にシローは、彼女の腕を引っ張っていった。

早速、屋台を準備して開店間際になると、シローある事に気付く。

「そつえば名前聞いてなかったけど……なんて名前？  
俺は衛宮士郎」

「私の事はセイバーと呼んで下さい、マスター」

「マスターかぁ……ううん、良い響きだ。

ラーメン屋でマスターっていうのも妙だけど、まっいいや！  
セイバーって外国の人でしょ。何所から来たの？」

「私の出身地はブリテン国です」

「ブリテン？……もしかしてイギリスのこと？」

「はい。現代ではそう呼ぶらしいですね」

「ほえ。イギリス人なのかセイバーは。」

「おっと、じゃあ試しにはいよ。家の自慢のメニューの一つ、醤油ラーメン」

「あ、これはどうも……」

出されたラーメンを口に運ぶ。

だが一口食べた瞬間、セイバーの表情はミルミル変わっていった。

「馬鹿な！……何だというのだ、この味はッ！」

「こんな……こんな美味しい料理が……この世界にあったのか……」

「……もしも……。美味しいって言うてくれるのは嬉しいんだけど、そこまでオーバリアクションしなくても……」

「何を言うのですか、マスター！」

聞く所によると、この日本という国には『武士は食わねど高楊枝』と『腹が減っては戦はできぬ』という二種類のことわざがあるそうですが、前者は嘘ですッ！断言してもいい！

戦場での空腹は命に関わります！逆に満腹なら士気も高まり、やる気もですッ！

「いや、満腹だと腹に被弾した場合の致死率が上がるって、フルメタで書いてあったような……」

「そんな事は如何でもいいのです！」

私はただマスターに兵糧という物の重要性を、正しく認識して欲し

かったのです」

「まあ、兵糧は重要だよな。」

横山の三国志でも、兵糧を燃やされちゃって困るシーンって一杯あったし」

「分かればいいのです。」

ところでマスターは三国志の書物を持っているのですか？」

「持つてるよ、全巻。」

良かったら見る？」

「いいのですか！

私も東洋における英雄に興味があつたものですから……」

「三国志は面白いから、たぶんセイバーも気に入ると思うぞ。」

それに最近では恋姫十無双も人気だし……」

「恋姫十無双………なんですかそれは？」

「えっと。大まかにいうと三国志に登場する武將が、何故か全員女性になつてゐる話だよ」

「……興味深いですね」

「マジ！」

「はい。後の世に男性として伝わる英雄、豪傑が女性として描かれているとは、少しそるものがあります」

「そうか……。セイバーはそんなもの（エロゲ）が好きなんだな」

「ええ、親近感が沸くと言ってもいいかもしれません」

「そうだったのか……。親近感（エロゲ主人公に）が沸くのか……。これは末期だな……」

「何か言いましたか、マスター？」

「いやいや、俺はセイバーを否定しないよ。

人間一人一人が違う思想を持っているんだ……。人の生き方に口出しするのは分不相応だ」

「あの……。何を言っているのですか？」

「いや皆まで言うな！

俺は分かっている。確かにセイバーの思っていること（エロゲ）は他人には理解されないかもしれない！

だけど、それがセイバーの選んだ道なら俺は応援するよ」

そう言ってセイバーの肩をポンポン叩くシロー。

（この人は私の想い（過去のやり直し）を知っている！？

そうだ、マスターは名を衛宮士郎と名乗った。

年から考えると切嗣の息子！つまり私の事を切嗣から聞いたのか……。だが私の願いは決して誉められたものではない……。征服王も……アーチャーも私の願いを否定したのだ。

しかしマスターは、我が望みを知ってなお、それを肯定してくれたのか！

どうやら、私は漸く、良いマスターと巡り会えたようだ」

思い起こせば前の主は最悪だった。

存在そのものを無視されるは騎士道を徹底批判されるは、最後には裏切られるはで、散々だった。

それに比べれば、供給される魔力は少し頼りないが、しっかりと自分を尊重してくれるマスターに召喚されたのは、喜ばしいことだった。

「おつ、客が来たぞ！

よしセイバー！ポカリを用意だ！」

「ポカリとはどれですか？」

「そこだ！そこにある紫色のやつだよ！」

「……………」。

マスター、私はポカリという飲料水を知りません。

ですが紫色のポカリという単語に、奇妙な不快感を覚えるのですが……」

「気のせいだよ、気のせい。

今の世の中、自分専用のモビルスーツに自分の名前を付ける痛いラスボスがいるんだから、紫ポカリぐらい可笑しなことじゃないって……」

「……………」

その後、セイバーは慣れない皿洗いや給仕に悪戦苦闘するが……それはまた別のお話。





### STAGE 3

「うーん。良い汗かいたーーーーー！」

今日も仕事を終えたシローは、屋台をたたみ帰宅する。

「じゃあセイバー。また明日も頼むわー」

「分かりました」

「じゃ、また明日」

「ええ、また明日……って待ちなさい！マスター！」

ノリでまた明日と言ってしまったが、そうじゃない。

「貴方は何を考えているのですか！

サーヴァントとマスターが離れ離れになって如何するんです！」

「サーヴァント？」

……

……

……

もしかして聖杯戦争って始まったのか？」

「今気付いたのですか！」

「そうか！セイバーはバイト希望じゃなくてサーヴァントだったのか！」

「何所を如何したら甲冑を着た私が、バイトを希望してやって来たように見えるのですか！」

「いや………チンチクリンなコスプレしてるとは思ってたけど………そうかサーヴァントだったのかぁ……」

「チンチクリンとは何です！こう見えても私の鎧は由緒正しきですね……」

「ま、鎧は置いておいてだ。そうか虎聖杯戦争は始まっていたのかあ……」

藤ねえのアナウンスはなかったんだけどな……」

「聖杯戦争の始まりにアナウンスなどありません！」

「え、ないの！？

じゃあどうやって始まるって分かるんだ？」

「令呪があるでしょう！

その腕に！」

「令呪ってなに？」

「聖杯戦争に参加するマスターに与えられる、三度だけの絶対命令権です！」

そんな事も知らないで貴方は参加したのですか！」

「勿論さ！」

「威張ることじゃありません！」

「そう怒るなよ……  
皺が増えるぞ」

「誰のせいですか、誰の！」

それに私は選定の剣を抜いた時点で、年をとる事はありません！」

年をとらないという言葉に、シローの頭は直ぐに回転する。

（年をとらない この世界には吸血鬼がいるらしい 吸血鬼 年をとらない セイバー）

「セイバーは吸血鬼だったのか？」

「取り消して下さい、マスター！  
私の何所が吸血鬼なのですか！」

「まあまあ。今の世の中、ゴスロリ金髪少女の吸血鬼がいるんだから、美少女騎士の吸血鬼がいたって可笑しくないって」

「何の話ですか！それにです「おい！その二人！こんな時刻に何を騒いでるんだ！」……なっ！」

セイバーとシローは驚く。

何故なら暗闇の中、一人の影が立ち塞がったからだ。  
日本国民でありながら拳銃の携帯を認められた存在。  
それは……………お巡りさん。

「いやゝ。ちょっとポカリの新製品についての会話が熱くなっちゃ

ったようでした」

「ポカリ？……職業は？」

「ラーメン屋経営してます。良かったらご贔屓に」

「全く、近所迷惑だから、こんな遅い時間に騒がないで欲しいねえ」

「いやほんとつ、申し訳ありませんでした、はい」

「まったく近頃の若い者は………そもそまだね、ラーメンというのは………」

………

………

………

「酷い目に合った………夜は騒ぐもんじゃないな」

「誰のせいですか、私の家の住所を聞かれた時は焦りましたよ。どうでもいいですが、マスターが適当に言った住所………大丈夫だったんですか？」

「問題ないって。」

俺の言った住所って、最近色々噂のある遠野の本家の住所だから。

流石の警察も遠野本家とイザコザ起こしたくないだろう」

「大問題です！」

大体、その遠野とかいう家の住所をどうやって知ったんですか！」

「実は遠野家の使用人の一人と仲良くてさ」。

家のラーメン屋でよくお家乗っ取り計画について話し合っただよ」

「そっちの方が問題じゃないですか！」

「大丈夫、半分冗談だから」

「半分本気という事ですかー！ーッ！」

そう言っただけでセイバーが頂垂れた。

シローの方は相変わらず能天気。

「何故でしょうか…」

まだ戦闘すらしていないのに、酷く疲れました」

「よしよし。ほらこれでも飲んで元気出せ」

「頂きます

ってなんですか、この味はー！ー

ーッ！」

「元気が出ると思って、ポカリに野菜ジュースを混ぜただけど…」

……不味かったか？」

「当然です！貴方はもっとまじな料理は作れないのですか！」

「認めたくないものだ。自分自身の若さゆえの過ちというものを……」

「認めなさい。それは完全なる過ちです」

「そんな事は置いといて、聖杯戦争の事について真面目に話すぞ」

「貴方が言い出したのでしよう!」

セイバーが思いつきりツツコム。

だがシローは特に気にした様子も無い。

「それじゃあ、今後の方針だけど………どうしたセイバー？  
元気がないけど………もしかして腹でも痛いのか？」

「……………続けて下さい……」

「?………そうか。んじゃまあ、これから虎聖杯を目指して頑張っていく事になる訳ですが………」

(虎聖杯?………聞き間違いか?)

「方針としては、取り合えずこれからもラーメン屋の営業は続けるという事で」

「何を言っているのですか、マスター!」

「聖杯戦争中なのですよ」

「聖杯戦争中だからだよ。」

願いが叶うビックライテムの所有権を廻って争うのが、聖杯戦争

だろう。

なら他のマスター達も冬木市中に捜査網を張ってる可能性が高い…  
…かもしれない。

俺の店ってユニークな客が来るから、そこそこ有名なんだよ。

そんな店が聖杯戦争が始まった途端、長期休暇に入る

なんか怪しそうじゃね？」

「はあ、一理ありますね」

「だから今後はセイバーに

」

「オッハー！士郎。今日の朝ごはんはなにかな〜」

「チクワ一本だ」

「嘘だッ！」

「嘘じゃない！」

「ガーン。

士郎！お姉ちゃんは、これから学校でアクティブに活躍しなくちゃ  
いけないのよ！

チクワ一本じゃもたないよー！」

「ポカリもあるぞ」

「ポカリじゃお腹は膨れないよーー！」

「落ち着け、藤ねえ。クールになるんだ。

この一本のチクワ、確かに見た目は一本だ！

だが実は……」

「もしかして二本重なってるの？」

「いや一本だ」

「どっちなのよー！ー！」

「兎に角だ！想像するんだ！

いいか藤ねえ。藤ねえは作るものじゃない、食べる者に過ぎない。藤ねえに出来ることは一つ。世界一美味しい料理を想像しながらチクワを食べるんだ」

「な、なるほど！」

「ほら、ガブツと！世界の中心でチクワを食べるみたいな感じに……」

「よーし。ガブツ」

食べた！藤ねえがチクワを！  
そしてハムハムと咀嚼する。

「こ、これは………！」

ふみゃふにゃの食感！そして味！  
香ばしさの中にある美味しさッ！  
この味はまさしく………」

「チクワね」



「チクワですから」

「チクワだもんな……」

・ ・ ・ ・ ・

「チクワーーーーーッ！」

そしてその見知らぬ少女は誰なのよーーーーーッ！」

虎は絶叫した。

## STAGE 4

衛宮邸では二人と人物が睨みあっていた。

冬木の虎こと藤村大河、そして冬木の馬鹿こと衛宮士郎である。

セイバーはそんな両者を静かに見守る。

「それでシロー！」

その見知らぬ美少女は誰なのよーーーーッ！」

先ずは虎の先制攻撃！

「家の店のファンだよファン。

そして新しいバイトだ！」

「バイトは分かるけど……

だから何でシローの家にいるのよーーーーッ！

シローはもう社会人だけど、他の子達はまだ高校に通う年齢なんだからね！

おねえちゃんは同棲なんて認めません！

見知らぬ美少女と同棲なんて不健全よ！」

「マスター、大丈夫なのですか……」

「まだだ！まだ終わらんよ！

藤ねえの同棲の問題点を再構築！

？同年齢の子は高校に通っている

？シローの年齢は1才

？美少女と同棲は不健全

これを打開するぞ、セイバー！」

「はぁ……………」

この奇妙なノリについていけないセイバー。

「第一の問題と第二の問題……………これに関しては問題ない！

日本の法律では男性は満18才以上から結婚可能！

更にこのゲームは元々18禁ゲームのため、必然的に登場キャラの年齢は18才以上！

よって同棲は倫理的に何の問題もないッ！」

メタ発言が色々飛び出したが……………

セイバーはスルーする事にした。

ギャグにシリアスを持ち込むことほど愚かな事は無い。

「うう……………駄目駄目！」

せめて二十歳になるまでは駄目！

私は切嗣さんに色々頼まれたんだからね！」

「H A H A H A！何を言ってるのだから……………」

俺の保護責任者は藤ねえの祖父である、雷画のおやっさん！

その雷画さん曰く、男は早くやつとけ！

とのこと……………よって同棲程度はノープロブレム！」

「ガーン……………」

最後の砦、保護者を使ってきた虎を、共通の保護者を持ち出し撃退したシロー。

だが彼は知っている。この沈黙が嵐の前の静けさだという事を……。

「セイバー……一つだけ教えてくれ……」

「なんでしょう?」

「お前はサーヴァントの中でどの程度強いと思ってる」

「まだ他のサーヴァントを誰も見ていないので、正確には分かりませんが」

「それでも平均以上の実力を持っていると自負しています」

「そうか……それを聞いて安心した……」

「任せたぞ、セイバー」

なにをですか？

そう聞こうとした時には、シローは部屋から出て行っていた。  
同時にゆらりと立ち上がる虎。

「うわああああああん！ヘンなのに士郎とられちゃったー！ー！  
ー！」

抜く！藤ねえが獲物を！

その剣こそは虎竹刀。数々の豪傑を血祭り？に上げたという妖刀である。

「なっ！いきなり如何したというのですか!」

「問答無用!」

「くっ！致し方ありません！

出来れば何も知らない一般人とは戦いたくは無いのですが!」

セイバーも出す！不可視の剣を！

二人の激闘の様子を、遠くから見守るシロー。

「藤ねえと戦うのは、分が悪いんだよな。  
頑張れ、セイバー。お前が？1だ」

やがて静まり返る。  
決着が着いたらしい…

「セイバー、無事か？」

「ええ……まさか一般人から一撃を貰うとは……  
一体この御仁は何者なのですか！？」

「気にするな。藤ねえは俺達とは違う時空で生きているんだ」

「……………早く普通の人間と会いたいです……」

「ん？何か言ったか」

「いえ何も……………」

その後、回復した藤ねえも含めて、一緒に朝食を<sup>ラメン</sup>食べた、  
虎は一回暴走すれば暫くは大人しくなるので、その間にテキトーに  
説明しておく。

全てが終わりタイガーが学校に行くと、漸くシローは眠りに付いた。

「さて今日も元気に仕事すつか！」

「そうですね……ところでシロー。」

この奇妙なほど魔力の籠った宝石は何なのですか？

もしか宝石魔術に」

「うんにゃ。前に俺の店に来た、七色に光る短剣を持ったおっさんが、お代について置いておいたんだ。

そうそう自称「永遠のピーターパン」、王様、魔法少女、猫型怪生物、カレー好きシスター、その他色々と来たこともあるぞ」

「……聞かなかった事にします。

それより準備をしますよ。もうそろそろ客の来る時刻です」

「ういーーーーー。」

せつせと屋台の準備をする二人。

昨日とは違い、シローが寝てる間に、色々と勉強していたセイバーも、その身体能力もあって、三人分は活躍した。

準備完了して暫くすると、屋台の前に客らしき影が現れた。

「貴方達、如何いうつもり。

聖杯戦争中にサーヴァントにやた」

「へいらっしやーい。何にしますか」

「だからサーヴ「へいらっしやーい。何にしますか」

「いい加「へいらっしやーい。何にしますか」

「ああも「へいらっしゃーい。何にしますか」

「う「へいらっしゃーい。何にしますか」

「k「へいらっしゃーい。何にしますか」

紅いコートを羽織った穂群原学園の生徒らしき少女は、喋ろうとしてもシローが途中で「へいらっしゃーい。何にしますか」と言ってくるので、用件を言う事が出来ない。  
といっても人目のありそうな場所で魔術を使うわけのも行かないので、少女が選んだ選択は……

「……………醤油ラーメンで頼むわ」

「毎度」

ニコニコしながらラーメンを作るシロー。  
その笑顔は正直ムカツク。

「はいよ、家の自慢の醤油ラーメン」

「頂くわ                      あれ、結構美味しいのね」

「家は愛情と怨念を込めて作ってますから」

「ちょっと！怨念は込めるな！」

「まあまあ、美味いんだからいいじゃないですか」

「良くないッ！それより聖杯せ……あ、このチャーシュー美味しい」

「それ家のセイバーが頑張ったんですよ。いや、いい労働力をゲットしました」

「当然じゃない。」

セイバーは七体のサーヴァントの中でも最優と呼ばれるクラスなんだから。

「ラーメンぐらいお茶の子さいさいよ」

「ほえ、セイバーって最優だったんですか？」

「そうよ。聖杯戦争もこれで五回目だけど、毎回セイバーのクラスは最後まで勝ち抜いてきたわ。」

私もセイバーを召喚しようと思ったんだけど、出てきたのは皮肉屋の弓兵で。

「まあ能力はかってるんだけどね」

「いやいや、お客さん。」

それはきっとシンデレラってやつですよ。

皮肉屋の弓兵さんも、内心ではお客さんのことを大事に思ってますよ」

「そ、そうかしら……」

「そうですよ」

シローと客はお互い顔を見合わせると

[illegible]



にこやかに笑った。

「あはははははははあ

ッてちっがー！ー！ー！」

冬木の虎に続いて、あかいあくまの雄叫びが木霊した。

## STAGE 5 (前書き)

アーチャーVSシロー？

## STAGE 5

「それで説明して貰えるかしら？」

今は聖杯戦争中よ。せ・い・は・い！」

「はあ、そうらしいですねえ」

パンツと少女が立ち上がる。

何となく頭から湯気が上がってるように見えた。

「そうらしいですねえ、じゃない！」

私達は戦争してるの！戦争を！

何所の世界に戦場のと真ん中で屋台開く奴がいるのよ！」

「ここにいるじゃないですか」

自分を指差すシロー。

「ああ言えばこう言う！」

「ふう、どうもお客さんは、少し歴史に関する教養が少ないようですね。」

歴史上、全く予想外の手段で争いを止めようとした例は多い。

例えばインドのモハンダス・カラムチャンド・ガンディーは、独立後に起きた宗教暴動を防ぐため何度も断食し、身を挺してこれを防ごうとした。

また少し戦争から外れるが、キング牧師は黒人差別に対して力ではなく非暴力不服従という、崇高な理念を持って立ち向かい、これに勝利した。……………彼等は生まれた国も人種も違う。しかし両名

ともが争いの空しさを知っていたが故の行動なのだよ。

だからさっさとマスターを降りてくれない？ぶっちゃけ戦うの  
ダルいし」

「……………途中までいい話だったのが、最後の一言で台無しにな  
りましたね」

「言っなよセイバー。客が見ている」

「あんた達は私をおちよくってるのかしら？」

見る者を凍えさせる笑みを浮かべる少女A

普通なら恐怖するのだが、残念ながらシローは殺気には鈍感だった。

「まあまあ。これからお互いに聖杯を求めて争う好敵手<sup>ライバル</sup>になる訳だ  
し仲良くやろうって。

はい家の自慢の味噌ラーメン。それとポカリ。

今日は奢っとくからさ」

「……………もういいわ。

確かに今から戦いつて気分でもないし、ありがたく奢らせてもらっ  
わ。

念の為毒見はさせて貰うけどね」

「毒見つて。幾らなんでも商品のラーメンに毒を盛ったりしません  
よ」

「だから言っただでしょう。

念の為よ、戦争なんだから万が一の事が起こってからじゃ不味いで  
しょう」

「まあいいや。はいよ味噌ラーメン二つ」

置いたのは二つの味噌ラーメン。  
そう二つだ。

「……………聞いてもいいかしら？」

「なんですか、少女Aさん」

「誰よ少女Aって！」

私には遠坂凜っていう名前があるわ！」

「成る程、遠坂凜、遠坂凜と……………  
それでは遠山の金さん」

「遠坂凜よ！どこに山と金があるのよ！」

「ほうほう、遠距離恋愛の”遠”に、坂から転げ落ちる幼稚園児の  
”坂”に、阿呆の凜の”凜”ですね」

「妙な覚え方すんな！」

それと何よ最後の阿呆の凜っていうのは！」

「松尾芭蕉の俳句です」

「んなわけあるかッ！」

「嘘じゃないですよ。松尾芭蕉の俳句好きな高校生の知人が、阿呆  
でその人の名前が凜なんですよ」

「一応聞いておくと、その高校生の名前は？」

「柳洞一成って知ってる？」

「穂群原学園の生徒会長なんだけど」

「やっぱり私のことが……」

「どうしたんですお客さん!？」

突然奇妙な奇声を上げて……」

「正直に答えなさい。」

私のこと前から知ってた？」

「知ってるよ。藤ねえがたまに話してたから。」

目立つ紅いコートを着てくる、妙な服のセンスの生徒がいるって」

「私のセンスはまともよ!」

「そんな事よりラーメン伸びますよ」

「あつ! いっけない」

もつと言いたい事はあつた少女A………もとい凜だが、折角のラーメンを伸ばすのは惜しい。

「……………聞き忘れてたけど、何で二個もあるのかしら?」  
流石に両方食べるのは無理よ」

凜の前には、二つのラーメン。

「え、俺はサーヴァント用に作ったんですけど」

「サーヴァントは食事なんて必要ないのよ。  
知らないの？」

「それにしても、セイバーはラーメンを五杯はおかわりしてたよう  
な……………」

「シロー！」

「は、はい！」

シローに猛烈な勢いで詰め寄ってくるセイバー。  
流石にシローも後退りした。

「シローから供給される魔力は微弱です、分かりますね！」

「そうだったんだ……………」

「ですから、私には食事により体力を回復する必要があるのです！」

「つまり要約すると、これからは食事は抜くなと？」

「はい！」

そう言うと、セイバーはさっさと皿洗いに戻る。  
だが常に凜の事を警戒してる辺り、サーヴァントとしての役目はこ  
なしていた……………たぶん。

「まあ、必要ないかもしれないけど、食事は重要だよ、うん。  
英気も養えるし……」

「そ、そうね……アーチャー出て来なさい」

取り合えず最優のサーヴァントの奇行？は見なかった事にしてアーチャーを呼ぶ凜。

しかしアーチャーは何時まで経っても現れない。

「アーチャー？どうしたの？」

流石に、妙だと思った凜がもう一度言う。  
すると、虚空から赤い外套を纏った男が現れた。

「どうしたのよ、アーチャー。」

そんな奇妙奇天烈な顔して」

「いや、少し頭を整理していた……」

（どうなっている？

まさか、これが私の可能性の一つとでもいうのか！？

いや……エミヤシロウの人生において、ラーメン屋になる要素など欠片もなかったはず。

だが現にこの世界のエミヤシロウはラーメン屋となっている……  
もしや歴史において致命的な歪みが発生したのか！？……これも一つの世界に同じ存在が同時に存在している影響なのか……）

「もしかしてラーメンが嫌いなのですか？」

「むっ……いやそんな事はないが……」



思考中にセイバーに話しかけられて咄嗟に返事をしてしまった。

「なら、冷めない間に食べて下さい。味は保障します」

自分のマスターである凜、それに嘗ての       であるセイバーに、  
こうも注目されると、流石に気分が悪い。

少し躊躇するが、一口分の味噌ラーメンを口に運ぶ。

「！」

一口食べた瞬間、英霊エミヤには分かってしまった。  
認めたくは無い！だが認めるしかない……

（私の敗北だ……）

アーチャーの食べた味噌ラーメンは少しだけ、しょっぱい味がした。

## STAGE 5 (後書き)

シローがアーチャーに勝てるのはラーメンとポカリだけです。  
他の料理ではアーチャーの方が上です。

## STAGE 6

「宣誓！我々はスポーツマンシップに乗っ取って聖杯戦争を正々堂々と戦い抜くことを誓います！」

「……如何して、高校球児のようなノリなのだ、この小僧は？」

「私に聞かないでよ、アーチャー。」

きつと現実で甲子園が近いからじゃないの<sup>リアル</sup>」

「凜、君も余りメタな発言はしない方がいい。  
ネタ要員になるぞ」

「あんたもメタ発言してるじゃない……」

「まあまあ、これからも良き好敵手として戦う仲間だから。  
あんまり悩まないでやろうじゃん」

「「あんた（貴様）のせいでこんなに悩んでいるのよ（いるのだ）  
！」」

「俺の事で？……まさかッ！

駄目ですよ、俺にはそんな趣味は！

特に、そのガングロさん！俺はノーマルな趣味です。  
文化人です！そういうのは阿部さんと犯って下さい！」

「私にもそんな趣味はないッ！  
それ以前に阿部さんとは誰だ！」

「やらないか？」

「やるかッ！」

シローとアーチャーの阿呆なやり取りを、凜は冷めた目で見る。  
彼女の中でアーチャーに対する評価が下がる。

「ところで……………ええと……………」

「俺の事ならご主人様って呼んでくれ」

「それじゃあご主人さ……………って呼ぶか！」

「ナイス、ノリ突っ込み！」

「うっさい！」

「まあ、俺の事はテンチョーがマスターかシローでいいよ」

「それじゃあシローで……………」

それでシローは監督役への報告はした？」

「監督役？……………監督って王監督みたいな？」

「違っッ！……………聖杯戦争のルールを管理する審判のようなものよ。」

そこでマスターの登録をするの」

「へえ、何処そこ？」

「丘の上の教会は知ってるでしょ。」

その神父よ。これがまた気に食わ「呼んだかね、凜」  
て綺礼！何であんたが此処にいるのよ！」

「ラーメン屋に来たならラーメンを食べるのが目的に決まっている  
だろう。」

店主。激辛坦々麺レベルMAXだ」

「ポカリは何味で？」

「無論！マーボー味だ」

「ういーーーーー」。

セイバー。マーボーポカリ頼むわ」

「了解です、マスター」

「ちょっと待ちなさい！

何で貴方達はそんなに冷静に対応してんのよ！」

「凜、遠坂の家訓は常に余裕をもって優雅たれ、ではなかったのか  
な」

見る者をイラつかせる笑みを浮かべる言峰。

「ッ！……………そうね」。

なら綺礼。ラーメンを食べるついでに、シローに聖杯戦争の細かい  
ルールを教えてあげて」

「お前に言われるまでもない。」

聖杯戦争の監督役として当然の義務だ。

それで衛宮士郎。聞きたいか？」

「いやメンドイからいいや。

大まかなルールは知ってるし」

「そうか……。

最後に言っておくが、もしも敗退した場合は、直ぐに教会へ来るといい。

これが私の携帯番号だ」

「どれどれ…………… 0 8 0 - \* \* \* \* - \* \* \* \*」

「もしも危なくなれば遠慮なく連絡しろ。

私もこの店のラーメンが食べられなくなるのは、非常に困る。

うむ！やはりこの店の激辛坦々麺は美味い！

おかわりだ！」

「ふふふ、そんな事もあるつかと準備していたのですよ」

言峰の前に、おかわり分のラーメンが置かれる。

「やるな、店主」

「やるなって、来る度におかわりするんだから、いい加減分かりますよ」

「それもそうか」

「それもそうです」

[illegible]

二人の笑い声が屋台に響く。

「ちよつと待ちなさい！」

あんた達は何でそうなに馴染んでるのよ!」

「常連だからな」

「そんな事を聞いてるんじゃない」

「ッ！」

背後に感じる悪寒。

絶対的な絶望と恐怖を凜は直感した。

「始めましてリン。」

私はイリヤ。イリヤスフィール・フォン・アインツベルンって言えば分かるでしょ」

銀髪に赤い目という、おおよそ人間離れた容貌の少女。

そして背後には2 m 5 0 c m以上はあるように見える巨人。

手に持つのは無骨な斧剣！だが殺傷能力には問題ないだろう。

「うん、うん、うん……」

「これはどんな状況なの？」

夜遅く、ラーメン屋に二人のマスターと二人のサーヴァント。おまけに聖杯戦争の監督役と一緒にラーメンを食べている。もっと言えばサーヴァントと思わしき少女は、皿洗い中。イリヤと名乗った少女には、意味不明な行動だった。

おまけストーリー1

実は来てた人達（らっきよ編）

「やー！テンチョー！

久方ぶりだね！」

「おー！

貴方はいつぞやの真っ赤な人じゃないですか」

「その節はどうも……

チョコレートラーメンを頼むよ」

「チョコレートポカリもありますよ」

「そうかい、それじゃあそれをお願いするでしょう」

やけにハイテンションな外国人は、優雅にイスに座る。

ラーメンの屋台に座る、真っ赤なシルクハットを被った男……  
かなりシユールな光景だ。

「いやはや、君の作るチョコは絶品だねえ」。

思えばこのチョコのお陰で、蒼崎の使い魔から脱出出来たんだよね。  
となると君は、私の命の恩人となるのかな」

「いやいや、大袈裟ですよ工場長、もといアルバさん」



ちなみに彼が蒼崎さんの使い魔から脱出出来たのは、スーツの中に常備していたチヨコポカリが、余りにも不味かった為、つい吐き出してしまったからなのだが……

アルバ自身は満足してるし、真実は隠しておこう。

「私は正直言つとだね。

一人の女に嫉妬していたのだよ」

「はあ、ありますよね。

そういうのって」

「だけど気付いたんだよ！

蒼崎になくて、私にはあるもの。

それはチヨコレートだよ！

そうだ、私はチヨコ作りに関しては、蒼崎を遥かに上回る術者だったのだ！」

「チヨコっていいですね。

どんなチヨコを作ってるんですか」

「ふふふ、聞いて驚きたまえ。

私の人形師としての技量をフル活用し、全身チヨコレートのメイドロボを作ること成功したのだ！」

「おおッ！」

「だが問題は、温度の高い場所だと溶けてしまう事なんだがね……。今度は全身チヨコレートのガンムを作ろうとも考えているんだよ、お台場に見習って」

「何分の一ですか？」

「勿論！一分の一に決まっているだろう」

シローは想像してみる。

イギリスのビックベンの隣に悠然と聳え立つ、全身チョコレート  
のガンダム。

「これは……新たなイギリスの世界遺産の誕生ですね」

「だろう！おおおおお！」

なんとなく創作意欲が沸いてきたぞ！

では私は本国へ戻ることにするよ！

さらばだ、店主！」

「アルバさん、お会計！」

だが工場長………もといアルバは驚くべきスピードで消滅してしま  
った。

「食い逃げで国際手配とか出来るかな？」

流石に無理かな？と思いつつ、次の客を待つシローだった。

## STAGE 7

「おお…………噂の弟子一号だ」

「何よ弟子一号って！

私はイリヤ！イリヤスフィール・フォン・アインツベルン！」

「…………分かった。

イリヤスフィール・フォン・チャーシューメンだな」

「違うッ！

何がチャーシューメンよ！そんな美味しそうな家に生まれた憶えはないわ！

それでも私は由緒正しい貴族なんだから、名前を間違えないでよ！」

「イーリ イーリ イリ お肉の子

ラーメンの出汁からやってきた

イーリ イーリ イーリ ふくらんだ（食べ過ぎ）

まんまるおなかの女の子（肥満）」

「危ないネタすなッ！

それと（食べ過ぎ）と（肥満）ってなによ！

私の、このスリムな体型のどこが肥満よ！」

「貴女はスリムというよりは、幼児体型なのでは？」

ついセイバーは口に出してしまった。

「そこのサーヴァントも黙ってなさい！」

「まあまあ、いずれ分かるさ……………気にするなよ  
もしあんな風になっても、きっと君を好きになってくれる奴が……………無理だな」

「無理つてなによー……………ッ！」

それにその同情視線はなに！？

私が太るのって決定事項！？」

「よし！聖杯への願いはそれにしよう！」

「大事な聖杯を、ヘンテコなことに使わないでよ！」

「だが断る！！」

この衛宮士郎が最も好きな事のひとは

ごく常識的な指摘を『NO』と断ってやる事だ

「なんなの、その非常識さは……………」

関わらないように、ラーメンを食べながら凜が言った。

「最初はジブリかと思ったら、今度はジョジョネタ……………王道ね」

「フオフオフオ。修行が甘いでござるよ弟子一号

ある！このジョジョネタには意味がッ！」

「セリフ回しまで荒木節にしないでよ！」

「別にいいじゃん。」

同作者の書いてる別の小説は、ジョジョの二次創作なんだし……………」

「それはメタ発言過ぎますよ」

「まあまあいいじゃないか、セイバー。」

ちなみに同作者の書いている小説『ヴァンパイア・オブ・リリカル』は絶賛連載中だから見てね」

「CMすなーッ！」

「甘いでござるよ、弟子一号！」

今時の漫画家だって同じような事すんだから、より敷居の低い二次創作界でこんぐらいやらないで如何するんでござるか！」

「何故にござる！？」

「昨日、るる剣を読み直してさー。」

やっぱ志々雄はいいキャラしてたな。

特に最後の『地獄の国盗り』のシーンはサイコー！」

「シロー！るる剣は、志々雄よりも剣心が、再び立ち上がり緑に挑むシーンの方が！」

「何でセイバーがるる剣知ってるんだ？」

「聖杯からの知識です」

「凄いな聖杯！」

漫画の知識までくれんのか！」

「というのは冗談で、昨日シローの本棚にあった漫画を読んでみた

のですが……………  
予想外の面白さで……………」

セイバーとシローのやり取りの一部始終を、見ていた凜がため息をつく。

溜息をつけば幸せが逃げるというが、今更逃げる分の幸せなどない気がする。

「アーチャー、私の中の聖杯戦争が壊れていくわ……  
もしかして私が可笑しいのかしら……」

「安心しろ。

色々と間違っているのは世界だ。君はまともだ」

アーチャーはそう言うが、この世界ではまともでは生きていけないのだ！

「……………こ、ここまでおちよくられたのは生まれて初めてだわ……  
もういい、やりなさい！バーサーカー！」

「  
ッ！」

「危ないマスター！  
下がってください」

慌ててセイバーがシローの前に立った。  
不可視の剣を構え狂戦士を威嚇する。

「くっ、アーチャー！」

「了解だ、マスター。」

「こちらも、漸くサーヴァントとしての仕事に戻れそうだ」

先程までのユルイ空気は吹っ飛んだ。

緊張が場にいるほぼ全員を支配した。

雄叫びをあげる狂戦士。

常人ならば、その放たれる威圧だけで失神し兼ねないものだったが

.....

生憎、シローは恐怖には鈍感過ぎた。

「落ち着くのだな。」

何事も冷静に物事を判断しないと痛い目にあうぞ」

考えられないほど真面目な雰囲気でシローが言う。

セイバーを含めた三人は驚愕していた。

あの不真面目の塊のような男に、こんな一面があったなんて。

「そんな口がいつまで言えるかしらね.....」

いいわ、先ずはお兄ちゃんからやってあげるわ。

でも安心していいよ。お兄ちゃんだけは殺さないであげるから」

「物騒な話は一先ず置いておいて.....」

フッフ、残念ながらイリヤスフィール.....あれ、なんだっけ？」

思わずズッコける一堂。

凜がプルプルと震えていた。

「ど、どうしてあんたは、雰囲気全台無しにするような発言をするのよー！ーッ！」

少しは空気を読みなさい！」

「仕方ないだろ、無駄に長い名前だったんだから。そうだ、そのイリヤスなんたらさん。いっそのこと山田太郎って名前に改名しない？」

「するかーーーーッ！」

おまけに何で男の名前なの。せめて女の名前にして！」

「それじゃあ、山田花子」

「だから嫌ッ！」

「我俥だぞ」

「ああもう！」

うるさい！うるさい！うるさい！

やりなさい、バーサーカー！

面倒だから殺していいわ！」

「残念だが、無理だよ。  
弟子一号君」

「……………その余裕が何時まで続くか楽しみね。  
あと命乞いしても無駄よ」

「命乞い？ナンセンスだ。  
何故ならお前は、”戦えない”のだから！」

「」「」「戦えない？」「」「」



思わずイリヤだけじゃなく、他のもの達まで口に出してしまう。

「そうだ。この少女Bは言った。

自分は貴族だと。……貴族にとって大切なことの一つは気品だ。そして今戦いの場になろうとしているのは、ラーメン屋。つまり食事場！」

「つまり如何いことなのですか？」

代表してセイバーが聞く。  
すると……

「決まってるじゃないか。

食事中に戦うのはマナー違反だろ」

「アホかーーーーーッ！」

凜が突っ込む。

「どこの世界にマナー違反で撤退するマスターがいるのよ！」

「ええと……<sup>レディー</sup>淑女の嗜みてやつ？」

「あのねえ、そんな理屈が通じるわ」「そうね」「……へっ？」

「確かにレディーとして、食事の場で戦うのは、マナー違反ね。いいわ、今日は見逃してあげる。

でも次に会った時は……..  
それじゃあバイバイ。お兄ちゃん」

そう言うと銀髪の少女は、帰って行った。

「これにて一件落着」

シローがそう言うと、凜はヘナヘナと座り始めた。

「店主。激辛担担麺おかわりだ」

「あんだ、まだいたの！」

バーサーカー襲来中も黙々とラーメンを食べていた言峰に突っ込んだ。

シローの聖杯戦争はまだ続く。

## STAGE 8 (前書き)

先ず始めに……今回はカオスです。

## STAGE 8

皆さん！いよいよお別れです！

地球を守る英霊連合は大ピンチ！！

しかも！アンリ・マユ最終形態へ姿を変えた士郎が！

セイバーに襲いかかるではありませんか！！

果たして！全世界の運命や如何に！？

ラーメン / stay night！最終回！

「セイバー大勝利！希望の未来へレディイイイ・ゴーツ！！」

「くっ！シロー！

貴方はどうしてこんな事を！」

地下大空洞の底！

セイバーは悪に堕ちた己がマスターに叫ぶッ！

エミヤシロウに嘗ての面影はないッ！

全身に黒い紋様、何よりも違うのは顔！全ての恨む表情！

「また君か？厄介な奴だよお前は！」

「貴方は！！」

「あつてはならない存在だというのに」

「何を？」

「知れば誰もが望むだろう、お前のようになりたいと！お前のように在りたいと！」

「そんな事……」

「故に許されない。君という存在は！！」

「私は……それでも私は……力だけが私の全てじゃない！！」

「それが、誰に解る？何が解る？解らぬさ！……誰にも！  
現にお前の本心を知らぬ俗人共はお前を裏切っただろう！」

「私の生き方を、貴方にとにかく言われる筋合いはないッ！  
そういう貴方は何をしています、一体！」

「知れたこと！  
見ろ！この大地に溢れる俗物どもを！  
このままでは、何時の日か人類は、世界にとって掛け替えの財産である自然を食い尽くすッ！」

「だからと言って！  
人類を滅亡させていい訳がないッ！」

「私エミヤシロウが肅清しようというのだッ！」

「エゴです、それは！」

「もはや止まらんよ。」

既にアンリ・マユは誕生するッ！

クツクツクツ、フハハハハハハハハ！

滑稽じゃあないか、セイバー！

人類は自ら生み出した、この世全ての悪によって滅びる！  
この運命は変えられんッ！<sup>Fate</sup>」

「人間の可能性を…」

ちっばけな自己満足のために潰されてたまるか!!」

「地球は、人間のエゴ全部を飲み込めやしない」

「人間の知恵はそんなものだって乗り越えられる」

「…ならば、今すぐ愚民ども全てに英知を授けてみせろ」

「貴方をやってからそうさせてもらっ」

「アルトリア・ペンドラゴン！

分かった！お前は生きていてはいけない人間なんだ！

英霊の座へ戻れ、セイバー!!」

「行くなら、貴様が行け！マスターッ！」

「天才の足を引っ張ることしか出来なかった俗人どもに、何が出来た？常に世の中を動かしてきたのは、一握りの天才だ！」

「何でもかんでも壊して…！」

「大きな流れを知らぬ者よ

万人は一握りの価値ある者にその生命を捧げるためだけに存在する

のだ」

「なにを!？」

「世を統べる者には人も物も栄誉も自由にする権利がある!!  
新たなる世界の構築のための犠牲など当然のこと!!」

「ふざけるなッ!!」

自分一人で世界を動かしているつもりなのか!!  
世界というのはそこに生きてる一人一人が頑張って作り上げるもの  
だ!!

彼等を見捨て  
何が作れるって言うんです!!!!」

「時代は変わったんだ!オールドタイプはうせる!」

「アーチャーの真似して赤い外套など着て…」

赤くすりやあ何でも三倍になると思ったら大間違いです  
!?!?!」

「お前が言っなや」

二人の話し合いが終わった。

同時に跳躍するッ!

それは終焉への鎮魂歌……

「英霊セイバー、アルトリア・ペンドラゴン…未来を切り開く!」

「俺はただ駆け抜けるのみ……」

打ち合う！

セイバーの聖剣

そしてエミヤシロウの双剣がッ！

「待ちに待った時が来たのだ！

多くの英霊が無駄死にで無かったことの証の為に…

再び御三家の理想を掲げる為に！ 第3魔法成就のために！

大聖杯よ！ワシは帰ってきた！！」

その時だった！

まだしぶとく生きながらえていた蟲爺が、現れた！

手には核弾頭を持って……

「戦いの…」

「邪魔を…」

「「するなッ！」」

「シンジ…サクラ…仇は…！」

その言葉を残し爆散する蟲爺。

「倍返しだああ！！！！！」

だが士郎は攻撃の手を緩めない。

微塵の容赦もなくッ！セイバーを、殺しに掛かる！

「士郎、その言葉は

死んだ女房の口癖だ！」



セイバーの聖剣が士郎の心臓を貫いた。  
しかし……

「ポカリがなければ即死だった……」

そう言つて士郎は、胸から取り出したポカリを投げ捨てる。

「今の私に士郎は倒せない……  
マーリン……私を導いてくれ！」

その時、

セイバーの中でピーナッツぽい種が弾けた。

「また戦争がしたいのか！？ 貴方は！」

「YES I AM!!」

「違うなッ！間違っているぞセイバー！  
敵は倒せる時に 倒す。 - それが  
正義の味方のやり方だッ！」

「戦争に正義も悪も無い  
ただ互いに正義がぶつかり合い  
血を流すだけだ！」

「否！断じて否ッ！  
俺は勝者となるッ！  
そして勝者〃強者〃正義だッ！」

「士郎！この世界に強者なんていない！

人類全てが弱者なんです！私も貴方も弱者なんだ！」

「おまえがサーヴァントとなつたのは状況に過ぎん！！」

「どう言われようと、己の運命を自分で切り開くのは、私だ！」

セイバーが言った時、

暗黒の世界から一人の男が現れた。

衛宮切嗣……………ある意味ではエミヤシロウを生み出した男である。

「シロー！！もう戦わなくていいんだ！」

「まだだ！まだおわらんよ！」

士郎の放った宝具達が養父の体を貫いた。

「士郎……………貴方は父親を……………」

「俺は爺さんに親をやってほしかったんだよ……………」

寂しそうに呟くと、再び双剣を投影した。

「とくと見るがいい……………アーチャー盟友が造りし、我がエミヤシロウの奥義を！」

I am bone of my POCARI .  
体はボカリで出来ている。

血潮は砂糖で、心はぶどう糖果糖液糖。

幾たびの自動販売機を越えて不敗。

ただ一度のURYYYYもなく、

ただ一度の無駄無駄無駄無駄もされない。

彼の者は常に一人　ポカリの丘でアミノ酸に酔う。

故に、生涯に意味はなく。

その体は、無限のラーメンで出来ていた。

「ってラーメンですか！

今までの詠唱のどこにラーメン要素があったんですか！」

思わず突っ込むセイバー。

だが士郎は淡々と魔術を発動させる。

「これが固有結界。

無限のラーメン　アンリミテッド・ポカリワークス。

この世界では、俺の今までに見た剣の全てがあるッ！

お前の聖剣もだ！」

「くっ、これは私のエクスカリバー……」

名前とか詠唱とか、全く関係ないだろという突っ込みは、置いておいて話を進める。

「ちなみにこれが……」

「馬鹿な！それは……」

「恐れたなッ！そうだ、これこそGNソード！  
ここは俺の距離だ！」

士郎がGNソードを持った瞬間にそれは起きた。  
そう士郎は…… GNソードが重くて持てなかったのだ！

「URYYYYYYYYYY!!」

逆ギレした士郎がセイバーに迫る。

「やはり君と俺は、運命の赤い糸で結ばれていたようだ！」

「戯言を！」

「そうだ、戦う運命にあった!!」

「私はそんな運命は信じないッ！」

「ようやく理解した！君の圧倒的な性能に、私は心奪われた！」  
この気持ち……まさしく愛だ!!」

「愛!？」

「だから俺は君を押し倒す！  
己の意思で!!」

「よくもズケズケと人の中にはいる。  
恥を知れ！俗物！！」

「断るッ！俺はしつこくてあきらめも悪い、俗に言う人に嫌われる  
タイプだ！」

「それでも男ですか！  
軟弱者！」

「闘いは弱いほうが勝つ！」

「そんな理屈ッ！」

「それが人だよ、セイバー」

「私は人間ではない！国のために体を強化したものだ！」

「お前だって同類じゃねえか！お国再興を渴げる王様さんよおオオ  
！！」

その時だった。

士郎の心臓を確実に、セイバーの聖剣が貫いた。

「グフッ！そうだ……」

完全平和を作るのに必要な物がもう一つあった。  
人を思いやり、理解する強い心だ！

そうでなければ、生きる資格など無いと言うことか…

ならば私は、どこまでも生き抜いてみせる！

誰よりも厳しく、戦士としてな！」

「士郎！何を！」

「聖杯を破壊する。

地獄への道連れは…、ここにある聖杯と戦争だけにするッ！」

「士郎……貴方は……

まさか最初から！」

「帰ってきて良かったよ…強い子に会えて…」

「士郎？……士郎……士郎……

シイロオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

「そんな夢を見た！」

「ここまで引っ張って夢オチですかッ！」

## STAGE 8 (後書き)

ちなみに最終回というのは嘘です。

## STAGE 9 (前書き)

今回はちょっとだけクロスです。



## STAGE 9

ラーメン屋衛宮亭。

衛宮士郎が店長だから衛宮亭。

衛宮亭は美味しいラーメンとユニークなメニュー、そしてメニュー以上にユニークな客で有名である。

ユニークな客が現れる理由は大きく三つある。

？宝石Gさん（プライバシーの都合により仮名）の影響

？奇妙な求心力

？宝石Gさんが店の周囲を変な時空にしたせいで、別の世界からの人間も来るということ

客の種類も色々だ。

代行者、魔術師、死徒、猫型怪生物、真祖、殺人鬼、魔法少女などこの世界に存在する者たち。

そして、スタンド使い、北斗の男、海賊王、忍者、魔法先生、管理局員、中国の武将、デビルハンター、ブラックジャック先生、スキマ妖怪、地獄先生、巡查長、海軍中将、自称新世界の神、死神代行、チクワ皇帝、筋肉マン、少佐、赤い彗星、幻想殺し、ロリっ子生徒会長、桃髪ツンデレ、GTO、相良軍曹、勇者王、ファーストチルドレン、錬金術師、海馬社長、史上最強の弟子、信長、etc……。

そして今日もこのラーメン屋に異世界からの客が一人……。どうやら今回の客は黒人男性のようだ。

「味噌ラーメンと餃子、それにビールをお願いします」

「うーーーーー。」

セイバーに水の用意をさせてシローはラーメンを作り始める。  
だんだんと美味しそうな匂いが漂い、やがて出来た！

「あいよ、ラーメンと餃子おまち！」

「ありがとう……」

ガングロの男性はものつすくく！  
疲れた様子でラーメンを食べる。

「はあ~~~~~~~~」

「どうしたんですかい？  
なにやら物凄く疲れてるようですけど」

「分かるかい？  
実は勤め先でね……」

最初はポツポツと語るだけだった客は、酒が入った途端ヒートアップする。

「だいたいね！私の何が悪いっていうんだ！

この年まで出来るだけ自分の持てる力を世のために役立てようと働いてきたんだよ！

なのに………何故こんなに否定されなくちゃあならないんだア！」

そうこのお方こそ、新たな小説が生まれてはアンチされる不憫過ぎる教師ガンドルフィーニ先生だ！

「何で魔法が使える癖に、高畑先生より弱いかだつて！？  
仕方ないだろう！時間がないんだよ、時間がツ！

朝から昼は教師、夜は魔法先生、それに家庭サービス！！  
どこに修行する時間があるんだツ！」

「そりやまた……大変そうですね」

「大変どころじゃないよ！私の一日の予定教えてあげようか！？  
朝6時起床

朝の鍛錬

19時まで学校

帰宅

23時魔法先生としての仕事

2時再び帰宅

どうだい！？それでも私に修行する時間があるとツ！そついつのか  
貴方は！」

「いや、俺は言ってますんって」

「そついえば、君の顔を見た事があるような……」

それはネギま世界に飛んだSHIROUとEMIYAです。

「そ、そんな事より、はいお酒」

「お、悪いね。」

それだけじゃあない！何故だか私がエヴァンジェリンを警戒すると  
言い出すと再び批判されるけど、如何して悪いんだ！大事な生徒が  
600万\$の賞金首と一緒になんだよ！

表の世界的に例えると切り裂きジャックが何故か生徒になって、生  
徒達と授業を受けてるようなもんなんだよ！まともな思考を持つて  
る人間なら警戒して当然じゃないか！！」

「600万\$……それって日本円でいくらだっけ？」

セイバーに訊ねるシロー。

どうでもいいが、現代人が過去の人間に、現代の通貨について訊ね  
るといふのは色々と間違っている。

しかし彼女は最優のサーヴァント、セイバー。

暇な時は漫画読んでもかTV見てるかの生活を送っていた者……。  
その程度の質問には答えられる。

「さあ、たぶん六億円ぐらいじゃないですか？」

訂正、大まかには答えられた。

「六億……ラーメン何杯分だ？」

「ラーメンの値段が300円ですから……200万杯でしょう」

「200万杯か……全部積み上げていったら何メートルになるかな  
？」

「さあ、そこまでは流石に」

「君達は私の話を聞いているのかい!？」

「「勿論!」」

「そ、それならいいんだ。

兎に角だよ! 私はこれでも少しでも人々の笑顔が守れたらいいと思って、この年まで身を粉にして働いてきたんだ! なのに何故エ! そんなに! 否定! されなきゃ! ならないんだアアアアア!

しまいには泣き出すガンドル。  
どうやら相当辛かったらしい。

「まあまあ、今日は半額でいいから。  
ほれ、嫌な事は酒で忘れて」

「ううううう、こうなりや今日は自棄酒だア!」

目から心の汗を流しながらガンドルが叫ぶ。  
それはあらゆる作品において否定され続けてきた男の、魂の叫びだった!

「ブブウウ! …な、なんだこの酒は! ?  
呑んだことのない、妙な味だ…」

「それはポカリ酒です」

「ポカリ酒?」

「そう、家の家庭農園で栽培された無農薬ポカリを、ポカリ工場で

ポカリに酒を加えたのが、この豆電球にも匹敵する新発明ポカリ酒なのだッ！」

「す、凄そうだな……」

「凄いのだ」

「では一つ、今度はじっくりと……」

そしてポカリ酒を躊躇せず……飲んだッ！

「ウンまああゝいつ！こっこれはゝっ！この味わああゝっ！サッパリとした酒にポカリのエクセレントな部分がからみつく美味さだ！！」

酒がポカリを！ポカリが酒を引き立てるッ！  
“ハーモニ” つっーんですかあゝ、“味の調和” つっーんですかゝっ！

例えるならサイモンとガーファンクルのデュエット！  
ウツチャンに対するナンチャン！高森朝雄の原作に対するちばてつやの“あしたのジョー”！」

「分かる人にしか分かんネタを……」

「なにか言ったかい？」

「いえ何も」

「そうか！まあなんだ！

今日は店主も飲もうじゃないか！

HAHAHAHAHAHAHAHAHA!!」

どうやらハイになり過ぎて、頭のネギ、もといネジが数本吹っ飛んだようだ。

「帰りましたね」

「嗚呼、帰った」

激闘から数時間。

お日様が見え始めた頃、ガンドルは帰った。

依然として職場は厳しいままだったが、帰り際に見せた笑顔は「まだ私は頑張れる」そう語っていたようないないような、それでもないようななかったような気がしなくもなかった。

「随分と曖昧だな、おい！」

「?どうしたんですかシロー？」

「いや、地の文がちょっとな」

「?」

「と、とにかく！」

彼なら、その……厳しい職場にも耐え、立派な父親になるだろう。オレはいつまでも見守っているぞ……」

「どうしたんです、キャラを被って？」

「いや、もう直ぐ終わりだから綺麗に終わろうかな……と思いますして」

「貴方らしいですね。」

しかし彼には頑張って欲しいものです。

他人に理解されない、という苦しみは私もよく理解出来ますからね」

「彼らがこれから歩む『苦難の道』には何か意味があるのかもしれない……。彼らの苦難が……どこかの誰かに伝わって行く様な、何か大いなる意味となる始まりなのかもしれない……。無事を祈ってはやれないが、彼らが『眠れる奴隷』であることを祈ろう……。目醒める事で……何か意味のある事を切り開いて行く『眠れる奴隷』である事を……」

「誰の言葉です、それ？」

「この前店に来た彫刻家の言葉だ。」

うん！いい言葉だ」

「そうですね。」

おや、見て下さい。今日も晴れそうですよ」

「そうだな」



「明日も晴れるといいですね」

「そうだな、でも晴れだけじゃ面白くない。

雨が降ると服が濡れたり、水溜りが出来たりと苦労するが、雨のお陰で美味しい野菜もできあがるし、明日は晴れになればと、てるてる坊主に祈ることが出来るんだからな。」

「今度は誰の言葉なんです？」

「どっこい、俺の言葉だ」

シローとセイバーはガンドルが去っていった方向を、晴れやかな笑顔で眺めていた。

「それと、セイバー」

「なんですか？」

「明後日は天気予報によると雨らしいぞ」

「どうして、貴方は最後の最後で雰囲気をぶち壊しにする事を言っているんですか！

いいじゃないですか、さっきので終わりで！」

「え？それじゃあ最後のシーンもう一回やる？」

「やりませんッ！」

やっぱり締まらない二人だった。

## STAGE 9（後書き）

なんだかんだで最近忙しく、中々更新できない作者です。

この話を読んだ方々は「何故にガンドル!?」と思うかもしれませんがん。

いえ、なんだか登場する度にアンチされるは酷い目にあうわのガンドルが余りにも不憫だったので、気付いたら書いてました。

これからも彼は、学園で元気に働いてくれることでしょう、たぶん。

では次回に会いましょう。

## STAGE 10

『続いてイギリスより速報です。』

本日未明、ビックベンの隣に突如としてチョコレートで出来た一分の一ガンダムが出現しました。

現場の前には全国のガンダムオタク、チョコレートマニアが集い集会を開いており、事態は混沌としている模様です。

この事件に対してイギリス首相ギレン・ザビ氏は『これはジオン……ゲフン、ゲフン……イギリス政府に対する挑戦である。敢えて言おう”カス”であると！』と述べており、自称世界一の名探偵（笑）であるしに捜査を依頼した模様です。

また、この事件を受けて中東の某国の首相であるソラン・イブラヒム氏は『俺がガンダムだ！』とイギリスに対抗してペーパークラフトで一分の一ガンダムエクシアを作成する、と宣言しています。』

「そうか、アルバさん。

アンタはやり遂げたのか……」

「如何したのです、シロー。」

「もしか下手人に心当たりがあるのでは？」

「さあどうだろう、

ただ、俺が言えるのは、あいつが一人の漢として、ガンオタとしてやり遂げた事だけだ。」

「……………この世界は本当に大丈夫なんでしょうか……」

少しだけ、現代の政治が心配になる王様であった。

今日も衛宮亭は開店する。

そう例え聖杯戦争中だろうと。

「おふくろさんの為にもエーンヤコーラー」

「なにを言ってるのですか、シロー？」

「うん、景気づけ」

今日も元気に屋台を準備するシローとセイバー。

どうでもいいが、絶対にこの二人、聖杯戦争忘れてる。

「よう」

その時だった。

青いボディースーツを着た謎の男が、二人の前に現れた。

「ああ、悪いけどまだ準備してるんで、後で来てくださいね」

「そうか、じゃあな」

「はい、ではまた」

「……って違う！俺はお前達と戦いに来たんだよ！」

「は？あんだ誰？」

「それは私から」

ずい、と今度はスーツを着た人が出てくる。

「失礼。私はバゼット・フラガ・マクレミッツ。  
協会から派遣された魔術師です。」

「ふゝん、協会ってなに？」

「シロー、協会というのは魔術協会、即ち魔術師による最大組織、  
だと思っています」

「曖昧だな」

「申し訳ありません。」

私はサーヴァントなので、この時代の魔術師に関しては疎いのです」

「そーなのかー。」

それじゃあ、ええとバゼットさん、でよかったのか？」

「ええ、構いません」

「正直、戦うの面倒くさいから見逃してくれませんか？」

「な、なにを言っているのです！

貴方も魔術師として命を賭けてこの戦争に参加したのでしょうか！」

「いやゝ、別に覚悟なんてしてないんだけどなあゝ」

「マスター、下がってください。  
ここは、私が」

「え、セイバーが？

…………… そういやセイバーってサーヴァントだったな。  
よし！俺は応援を呼ぶから、それまで耐えてくれ！」

「分かりました、マスター。  
貴方に勝利を！…………… 応援？」

セイバーは最後の言葉が気になったが、相手は待つてくれない。  
槍を構えた男、恐らくはランサーがセイバーへと向かってきた。

シローは携帯でとある場所に連絡しながら、セイバーとランサーの  
戦いを見物する。

（ほえゝ、これだけ見ると映画みたいだ。  
サーヴァントって本当だったんだな。  
確かにこれは人間じゃ勝てんわ）

「そらそら！如何したセイバー、この程度かッ！」

「世迷言をッ！」

更に激しくなる二人の戦い。  
そのど真ん中に突如として、黒い影が飛び込んだ。

「「！」」

咄嗟に飛び退く両者。

中心には何時の間にやら一人の男が居た。

「貴方は……何故貴方がここにいますか!？」

「久しいな、バゼット。

三日ぶりか」

「あん、聖杯戦争の監督役が何のようだ？」

「いいや大した用事ではない。

ただ、私はこの店主を助けに来たのだ」

「はあ!？何を言っているのです、言峰!

監督役が戦いに介入するなど正気ですか!？」

「無論、私は正気だ。

逆に訊ねるがバゼット。

お前は美しい華を見て如何思つかね？」

「は、華？」

「そうだ、大抵の人間が抱く感情は美しいだろう。  
それと同じだ。

私にとって唯一の楽しみはマーボーなのだよ。  
そして世は広しといえどマーボーラーメンとマーボーポカリがある  
のは、この店だけだ。



故に私はお前を妨害する。」

「ふ、ふざけないで下さい！」

聖杯戦争とマーボアのどっちが大切なんですか！」

「マーボアだ！」

「開き直らないで下さい！」

ゼエゼエと肩で息をするバゼット。

「まあ落ち着けよバゼット。

ようするに、この神父をとっちめてからセイバーをやりやいいんだ  
ろ。」

簡単じゃねえか」

「ほう、ランサーのサーヴァントよ。

私に戦いを挑むというのか？」

「それはこっちのセリフだ、エセ神父。

テメエ如きがサーヴァントに勝てると思ってんのか？」

「フム、お前は如何やら勘違いしているようだな」

「あん？」

「私は一人で来た訳ではないッ！」

バツ、と言峰が腕を振り上げる。

すると、再び黒い影が二つ、戦場へと降り立った。

「なっ！……………テメエ等なにもんだ！？」

「魔術師、荒耶宗連。」

「同じく。吸血鬼、ネロ・カオス」

「そして、代行者、言峰綺礼」

「『三人揃って！！！！』」

黒い三人が空中でポーズをとる。

「『中田三連星推参ッ！！！！』」

「いやいやいや、可笑しいだろ！

テメエ等全員所属してる組織が可笑しいだろ！

なんて手エ組んでんだよ！それ以前に声が同じように聞こえるぞ！」

「中の人ネタだ」

「言っな！」

幽鬼のように中田三連星はランサーへ歩み寄る。

「行くぞ、光の御子」

「マーボアの」

「混沌の」



「ええと神父と坊さんと教授？」

「訳が分かりません！」

如何して魔術師と神父と吸血鬼が共に戦ってるんですか！？」

「いや、だから中の人的に」

「メタ発言ばかりしないで下さい！」

「気にするな。お、ランサーが逃げたぞ」

「なんですって？」

セイバーは見た。

理不尽な猛攻に押されたランサーは自らのマスターを連れて撤退していた。

「さて、終わったな。

ところで店主。

確かランサーを撃退した暁には……」

「分かってるって、今日は奢りにするって」

そう言っただけで顔で屋台に入る三人。

余りにも理解の度を越えた光景に、セイバーは考えるのを止めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7770m/>

---

ラーメン/stay night

2011年1月8日06時44分発行